

茨の鬼と邪な仙人の昔話

BNKN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

茨木華扇と霍青娥による芳香の取り扱い日記

初めての投稿ですので至らぬ点多々あると思います。

どうか温かい目で見てください（血涙）

目次

茨の鬼と邪な仙人の昔話

—
1

茨の鬼と邪な仙人の昔話

春告精が仕事を終え、いよいよ太陽の畑の向日葵達が一齐にその顔を太陽に向ける頃、一人の仙人がとある人物に会うべくその家を出た。

その手には初対面の時に手渡された名刺を持つている。

「仙人どうし今後ともよろしくね〜♡」

そう言つて渡された名刺に書かれている連絡先に向かおうというのだが、1つ気になることがあつた。

名刺にはこうある。

「命蓮寺の裏の墓地にいる子に言えばその子が私を呼んでくれます。」

なんとも面倒な手続きが必要なものだ。直接に家の場所を書いてくれれば自分から向かうのに。と少しの疑問を抱きながら片腕有角の仙人、茨木華扇は山を下りていく。

途中人里で土産に甘味を買つて行き、無事命蓮寺裏の墓地へと辿りついた。

華扇は何度か「墓地にいる子」を見かけたことがある。と言うのも今日はその

子の話をしにあの邪仙に会いに来たのだ。

いざその子を探そうと足を動かしたその瞬間

「うらめしやー!!驚けー!!」

横から愉快な忘れ傘、多々良小傘が元気に声をかけてきた。

「……」

驚いたのではなく呆気に取られ暫く呆然としてしまう。

遠くで山彦が「驚けー!!」と繰り返しているのが虚しさを引き立たせた。

「……… なんて驚いてくれないのよー!!」

ここでやつと、小傘さんは驚きを食べてお腹を満たしているんだっと思ったと思いつ

した。

「い、いやほらちゃんと言ったよ?驚いてたから止まってたんですよ。」

取り敢えず誤魔化してみる。

「…… 嘘だよ。だって私のお腹が膨れないもの……。」

「あ、あーそれは……。」

駄目だったみたいだ。しょぼんと俯く彼女を見てると驚いて上げてればなど思う。

そう思ってる時点で驚けはしないのだが……

「別にいいよ…… 気なんか使わなくても。大体の妖怪は驚いてくれないもん。それに、

死体、宮古芳香の姿があった。

「こんにちは。…… 久しぶりですね。」

「おー？ ひさしぶり？」

「ああ、いえ、気にしないでください。」

「おー。せーがに会いたいのかー？」

「…… ええ、お願いします。」

「しばし待てー。」

そう言うと芳香は大きく息を吸った。

「せーがーがーがー！！！！」

（なんて原始的な……）

そんなあまりに愚直な方法に華扇は苦笑いしか浮かべることが出来なかった。

（第一、大声で読んだだけで出てくるわけが……）

「はーい、どなたー？」

（ええ…… 出てくるの……）

そう言つて地面に穴を開けて出てきたのは今回の目的である無理非道な仙人、

青娥娘々こと霍青娥である。

「あら、どなたかと思えば、華扇さんじゃないですか。こんにちは。」

「ええ、こんちには。変わりないようで安心しました。」

「変わるわけですね。仙人なんでもの♪まあ、立ち話も何ですし上がって下さいな。」

そう言つて先ほど地面にあけた穴に入つていく青娥。

（これじゃあ上がつているのか、下つているのかわからないわね。）

そんなことを思いながら華扇もその後についていった。

神霊漂う欲の世界、豊聡耳神子の創つた仙界にある青娥の家で華扇は腰をおろしていた。

「ごめんなさいね。あまりここには長居しないものですからあまり片付いてないのよ。」

「いえいえ、こちらこそすいません。いきなり押しかけた私が悪いですから。こちらつまらないのですが……」

そう言つて道中買つてきた土産を渡す。

「あら。気にしなくていいのに。でもそうね、折角ですから頂きますわ。お茶を出すので少し待つていて下さる？」

「ええ……」

そう言つて暫くして青娥はお茶と共にお茶請けとして先程の土産の甘味を出してきた。

「あの、これは？」

「おつちよこちよいな仙人さんは忘れていた様なので説明しますわ。私も仙人ですから〔食〕には意味はありませんし取っておりませんわ。」

「あつ…。」

「その様子では完全に失念していた様ですわね。まあ好意ですので断るのもどうかしらと思つてね。それに、あなたこの甘味好きでしょう？時々人里で食べているのを見かけますわ。」

「…。」

凶星である。

「さて、お茶請けの話は置いておいて。今日はどうしました？」
「え、ええ。実は芳香についてお話というか、聞きたいことがあります。」

華扇の真剣な空気を読んでか青蛾は座りなおす。

「芳香ちゃんはどうしました？人は襲わないように命令しているはずですが…。」
「ああ、いえ別に誰かを噛んでキョンシーにしたとかそんな話じゃないんです。」
「?では…。」

「ここ」で華扇は一息入れてから

「あの死体……都良香の体をどこで手に入れたんですか？」

「……どこというの？ 死体なんてどこにでもありますわ。それこそ墓地にたくさん。」

「この際、墓荒らしがどうのということはおきましよう。ただ、都良香の死体は墓にあるはずがないですよ。」

「……。」

「彼女は大峰山と言う山に籠もり、長い時を経て仙人になった筈です。彼が百数歳を迎えた時に見た姿は若い頃のままでした。それは即ち仙人へと昇華した証です。」

「……なぜあなたはそれを？ 芳香ちゃんのご友人だったのですか？」

そう聞かれ、華扇は徐に自らのシニヨンのリボンを外した。

そこにあつたのはあらゆる妖怪の長たる証、二つの角が頭から生えていた。

「なるほど、あなたがかの……高名な茨木童子でしたか……。でしたら芳香ちゃん、いえ都良香は……存知の筈ですね。」

「……私達は羅生門の前で出会いました。私が元々門の前に立っていた時に良香が通りかかり、

『気齎れては風新柳の髪を梳る』

と読み、私が

『水消えては波旧苔の鬚を洗ふ』

と返しました。

そこから私達は何度か一緒にお酒を飲むようになりました。：：お酒の席で酔っ払うといつも彼女は言っていました。『死ぬのは嫌だなあ。お前さんが羨ましいよ、鬼のお前さんが：：』彼女は常日頃から不老不死になりたいと考えているようでした。しかし、当時の私は唯の鬼元より長命が約束された肉体を持っていましたから、人間が長く生きる方法なんて知りませんでした。：：いえ、正確に言えば一つだけ知っていました。」

「？」

「それは私の持つ茨木の百薬枘についだ酒を飲むことで体を治し、体を鬼に変えていくという方法です。ただ、私も友人を鬼に変えたくはありませんでしたし、良香もそれを望みませんでした。」

「まあ、単に鬼になっただけなら退治されて死ぬか封印かされるのが落ちでしょうね。」

「ええ、そこで良香と私は人間が不老不死になる方法を探しました。そして見つけたのが：：。」

「：：仙人になることだった。」

「そうです。それからの良香は生き生きとしていましたよ。そしていつからか仙人になるための修行をするため山へ籠りました。それが大峰山です。私は友人が短い命の中でたった一つのモノを目指している姿に憧れや羨望を抱きました。．．．私は人に近づいたために私も仙人になろうと良香とともに山にこもりました。そうして私より先に良香が仙人となりました。私は鬼ですから、仙術と相性も合わなかったのです。暫く修行していると、私の仲間たちである酒吞童子、星熊童子らが討伐されたという噂を耳にしました。その噂を確かめるために私は一度山を降りることにしました。．．．良香とまた出会う約束をして。」

そう言つて華扇はお茶を一すすりして、また話始める。

「数十年彼らを探し漸く地底に見つけ、無事を確認で　きたので山へ戻つてみるとそこには良香の姿はありませんでした。勿論探しました。しかし、仲間たちの時とは違い見つけることは叶いませんでした。そこから私は一人仙人になり、この幻想郷へとやってきました。そして、貴方達の起こした。．．．異変となつてしまつた事件が起きます。異変解決は博麗の巫女が赴くのが常ですので、私は霊夢の跡をつけ様子を見ていました。．．．するとそこでもう二度と会うことはないだろうと思つていた良香を見つけました。それもキョンシーとなり、盾として使われている姿で。

．．．．私の話はこれで終わりです。次は貴方から聞きたいものです。芳香ちゃんの

話をね。」

暫く青蛾は黙っていた。そして、静かに話始めた。

「……私は力の強い人が好きですわ。」

「？」

「権力、腕力、財力、どんな力でもいいのだけれど、力を持っている人を見るとお近づきになりたい、そんな風に考えていましたわ。そこで大陸からこの島国に来て聞きつけたのが都良香でしたわ。彼女の力が強いのはご存知でしょう？ 都でも有名でしたから。私はいつものようにお近づきになろうと探っていると突然彼女が姿を消してしまいました。諦められない私は探しました。すると仙人になるために山にこもって既に何十年という話を聞きました。それを聞いて私は一気に不安になりました。」

「不安？ 一体何に？」

「あなたは鬼から仙人になったので、まだ経験したことがないかもしれません。」

「だから、一体何が？」

青蛾の遠回りな発言にイライラを募らせた華扇は続きを催促する。

「人間から仙人になり寿命を伸ばすと地獄から使者が来てそのものを殺してしまうのです。あなたも見たでしょう。私が水鬼鬼神長に水攻めされていた様子を。」

「まさか……」

「……私に何も言わないのですか？あなたのご友人をキョンシーに使役しているのですよ？怒らないのですか？」

「死を冒読するという発想は人間のものです。我々鬼にはありませんし、強いていうなら殺された本人の責任ですから。」

「しかし……」

「それに。鬼は嘘を付く人が嫌いですからね。」

華扇はそう言つて苦しそうに微笑んだ。

「でも、最後に芳香ちゃんと言話をさせて下さい。」

「ええ、構いません。ただ、対して話は出来ませんが……」

「大丈夫です。一言二言です。」

そう言つて華扇は立ち上がる。お邪魔しましたと言つて出ていこうとすると青蛾がふと、呼び止めた。

「顔の札を剥がせば、歌を読みます。いつも同じ歌なのできつと何か意味があるのでしよう。私にはその歌に込められた良香の気持ちはわかりません……。あなたならわかるかもしれませんわ。」

元来た道を辿り墓地まで戻ってきた華扇。

「おー。終わったかー。じゃあなー。」

「さよならの前に少しだけいい？」

「おー？」

「貴方は今幸せ？」

「おー!!セーがは優しいぞー!!」

会話は成り立っていかなかったが芳香の満足そうな笑顔が質問の答えとなっていた。

「そう……。あとーっだけ。少しの間札を取るわ。」

そう言つて華扇は芳香の顔についている札を取り払つた。途端芳香のまとう空気が懐かしいものになつていった。そして静かに歌を読み始めた。

「気霽れては風新柳の髪を梳る……」

「!!」

華扇があつけに取られ黙つていると同じように読み続ける。誰かが下の句を返してくれるのを待っているかのように。

「気霽れては風新柳の髪を梳る……」

華扇は声を震わしながらもしつかりと返す。

「氷消えては波旧苔の鬚を洗ふ」

そう言うのと良香は芳香よりも幸せそうになつこりと笑つた。

た…。

これから暫く命蓮寺裏の墓地に毎日通う、山の仙人の姿が見られるようになつ